

第 23 回国際宗教学宗教史学会 (IAHR)

世界大会 パネル全体報告

第 23 回国際宗教学宗教史学会 (IAHR) 世界大会が、8 月 24 日から 30 日にかけて、ポーランド・クラクフ市のヤギェウォ大学を会場として開催されました。本学会からは、25 日に、「Rethinking the Concept of “Religion”: From the Perspective of “*seken*” (“the World”) and “Freedom” in Modern Japan」と題してパネル発表を行いました。その趣旨を簡単に説明します。

現代の日本人の多くは「無宗教」を自認するが、実際には初詣や盆などの行事に参加している。ここに見られるのは、「無宗教」とは主に個人の信仰を指す一方、行事は宗教ではなく生活慣習として捉えられてきたという事実である。こうした慣習としての宗教は「世間」によって支えられてきたが、同時に「世間」は同調圧力を生み「信仰の自由」を抑圧してきた。本パネルでは、このような現代日本の「宗教」のあり方を、「自由」の諸相を手掛かりに再考する。

以上がパネルの趣旨となります。この趣旨に基づいて、本学会の会員である井上善幸、末村正代、古荘匡義、宮本要太郎の 4 名が発表し、マイケル・パイ先生からコメントを頂戴しました。各発表の内容およびそれに対するパイ先生からのコメントについては、各発表者から報告されていますので、全体の質疑応答の内容について簡潔に報告いたします。

1. 「習俗」とギリシャの *nomos*

参加者から、日本の「*custom* (習俗)」は古代ギリシャの *nomos* に近いのかという質問がありました。パネル参加者からは明確な回答が出せませんでした。澤井先生から、「両者は似ているが、ギリシャの *nomos* はより知的で、文脈が異なるため単純比較はできないと思う」とコメントがありました。

2. 「世間」とブルデュー理論

別の質問者は、ブルデューの *habitus* や *doxa* の概念と世間を比較できるかと問いかけました。回答側は「世間は文脈依存で制度化できず、個々の人の所属によって意味が変わる点に特徴がある」と述べました。

3. 鈴木大拙に関する質疑

鈴木大拙が浄土真宗を西洋で紹介しなかったとする発表に対しては、*Mysticism, Christian and Buddhist* での浅原才市とエックハルトの比較、また『教行信証』英訳の試みを指摘して、異論が唱えられました。回答では、大拙が確かに妙好人や象徴論に関心を持っていた

ことを認めつつも、西洋への紹介は選択的であり、聴衆に合わせた「伝達戦略」の一環だったと説明されました。

4. 最後の質問と締めくくり

最後に「nomoi と世間、あるいは日本人が重視する『間柄 (*aida-gara*)』』についての問いが出ましたが、十分な議論の時間はなく、パネルは終了となりました。

なお、参加者は42名と多数で、このテーマが多くの研究者の関心を集めていることがよく分かりました。